

安富歩氏インタビュー

中村隆之*、長津十**

これは、2023年12月26日に行われた安富歩氏へのインタビューの記録である。長津が英訳し、経済学の哲学系の雑誌に寄稿される予定である。

安富歩（Yasutomi Ayumi¹⁾）氏は、1963年生まれ。京都大学経済学部を卒業後、住友銀行に勤務し、同大学院に戻って経済史を専攻。森嶋通夫の京大での特殊講義（1989）をきっかけに弟子となり、LSE（London School of Economics and Political Science）のサントリー＝トヨタ経済学・関係分野研究所（STICARD）の滞在研究員として教えを受けた。

『「満洲国」の金融』（1997）で日経・経済図書文化賞を受賞。満洲を研究対象とした背後には、暴走やパニックを理解するという動機があった。『貨幣の複雑性：生成と崩壊の理論』（2000）において、非線形科学を用い、単純な形式のなかで経済現象を理解しようとする既存の経済学を問い直した。そこで得られた「創発」という概念を『複雑さを生きる：やわらかな制御』（2006）においてさらに発展させ、認知とは何か、コミュニケーションとは何かを基底的なレベルで理解するに至る。「市場・共同体」「選択」「価値」「貨幣」といった経済学的な諸概念の哲学的、思想史的再検討を『生きるための経済学：〈選択の自由〉からの脱却』（2008）、『経済学の船出：創発の海へ』（2010）において行った。これらの論考はたんなる既存の経済学批判という枠を超え、哲学に伏在する潮流―スピノザ、ヴィトゲンシュタイン、M. ポラニー、等々―を捉え

* 青山学院大学経済学部教授。イントロの執筆、全体の編集。

** ヘルシンキ大学社会科学学部教授。インタビューの企画・実施、全体の編集。

1) 「あゆむ」という読みであったが、2015年前後から「あゆみ」と名乗っている。

るものに昇華する。その到達点が『合理的な神秘主義：生きるための思想史』（2013）である。

創発的コミュニケーション（＝相互に学習過程が開かれている関係）がなぜ成立するのかは分からない（神秘）が、それを邪魔するものは何であるかは理解できるし、邪魔するものを退けることはできる。このアイディアを基軸に、孔子、老子、あるいはドラッカーの思想が安富流に解釈される。また、創発的コミュニケーションが阻害されている状態を「ハラスメント」と捉え、現代社会の問題に鋭く切り込む。

深い知性に裏打ちされた、歯に衣着せぬ発言は、本インタビューでも遺憾なく発揮されている。

安富歩インタビュー

1. 考える言語について

長津十〔以下、長津〕 考える言語ということに関して安富さんは、英語で書くことで、選択について自由に考えられなくなるということを指摘されています。

安富歩〔以下、安富〕 私は日本語でしか考えないようにし始めてから、自分の考えを英語に訳せなくなってきたんですね。90年代には英語で読む努力をしてたんです。森嶋通夫のように、イギリスとか国際的な大学に移ろうと思ってたんで。国際的な経済学者になるには英語で読み書きしなきゃなと思って。しかも理論経済学とかじゃ勝てないからさ。満洲とか中国に絞って東アジアの経済についてやれば、きっと比較優位があるから。それでアメリカかイギリスの大学に移ろうと思ってたんですけど、そうするともう彼らのなんかせこい枠組みから出られないんですよね。あ、これ無理だわと思って。なので英語で読むのをやめたんですね。そこまでやらないとやっぱり

選択の問題²⁾を相対的に考えることはできないことに気付いて、それから日本語でしか書いてないです、ほほ。なので、私のような考え方を、英語圏の哲学とか経済学の雑誌に出すっていうのは無理なんですよ。もう不可能だってことが分かって、まあ、インタビューしていただくならまだ、インターフェースがありワンクッション置くので可能性があるなと思って引き受けた次第です。

長津 ありがとうございます。それで、この企画ではさらにワンクッションあって、哲学でも経済学プロパーでもなく「経済学の哲学」の専門雑誌のオーディエンスを念頭に置くことになるので、その説明をします。一言で経済学の哲学といっても色々な分野の人がいるんですけど、その問題関心の中心には、安富さんがご自身の研究の出発点だと仰る「経済学が何故かくも非現実的なのか」という疑問があり、それを科学哲学の観点から分析している学問です。基本的に経済学に対しては批判的でありつつも、経済学者の与えるモデルにも説明力というポテンシャルがあるのではないかと、ということを中心に論じてきました。現在では問題関心が広がり、例えば行動経済学とか、経済学の色々な分野の歴史や方法を実証的に研究するようになっていきます。最近 Luis Mireles-Flores と僕が『経済学史研究』に書いた俯瞰論文³⁾では、経済学の哲学には「主流派バイアス」があると指摘しました。結局、経済学方法論とか哲学は主流経済学を追いかけてしまっていて、それに隷属してるというか。最近経済学史をやってるあるフランス人と話していて気づく機会があったんですが、その人もすごく批判的なんですけど、やっぱりずっと新古典派、戦後のアメリカ経済学を追っていて、そういう経済学者のアーカイブとかを分析しているので、批判的なんですけど。

2) 安富氏は「選択の自由」という概念がもつ問題について、多くの箇所で言及している。『生きるための経済学：＜選択の自由＞からの脱却』第三章「近代的自我の神学」などを参照。

3) Luis Mireles-Flores and Michiru Nagatsu (2022), “Methodology and Philosophy of Economics: A Table of Two Biases.”『経済学史研究』64 巻 1 号、33–57 ページ。

安富 そうなんです。結局、アンチ巨人ファンが、読売テレビを見てるみたいなことになるんです。

長津 そうですね。もちろん経済学の科学的な実践をより良くしたいという規範的な構想は背景にあるんですが。科学哲学からアプローチして経済学を研究する人は、経済学に批判的でありつつもその科学としての方向性自体については異議を申し立てない傾向にあります。いわゆる Heterodox [異端派] の人たちを考察することも少ない。なので、主流派を批判的に考察しながらその枠組に取り込まれてると言えるかもしれません。

安富 そうなんです。だから、私が経済学批判をやめたのもそれが原因なんです。経済学を批判してる限りは、その経済学の土俵の上に載ってるってことになっちゃって。それなので経済学を批判するのも意味がないし、それを英語圏で、英語でやろうとすると、その罫から出られないんです。英語で書いて論文を出そうとすると、どこかの土俵に載らないといけないんですけど、どっかの土俵に載るともうその土俵から出られなくなるんです。それで最終的に私は90年代は物理学の雑誌、数理科学の雑誌に論文を書いてたんですけど⁴⁾、そしたらあれは物理学、数理科学だから関係ないって経済学者が思うっていうことになって。さらに、やっぱり物理学もその同じ枠組みの上に載ってるんです。つまり、必然か選択かっていう枠組みからは外れないんですよ。で、これはまとめて外れないと別の考え方っていうのができないことに、90年代の終わりぐらいに気付いたんです。

長津 気付いたというのは、他分野とか他言語の文献を並行して読んだり考えたりしながら、例えば、中国語ですとか、そういうところから気づいたのでしょうか。安富さんが引用されてる文献はかなり多岐にわたっています。

4) 例えば Yasutomi, A. (1995). "The Emergence and Collapse of Money," *Physica D: Nonlinear Phenomena* 82 (1-2), 180-194. [https://doi.org/10.1016/0167-2789\(94\)00234-H](https://doi.org/10.1016/0167-2789(94)00234-H)

安富 内在的に気付いたんですよ。自分が何か理解しようと思っているものに到達しないという感覚が。なんかどうしてもその一番大事だと思っているところに近づいていかないっていう。で、近づかないで脇道に逸れると論文が書ける、研究はできる。けどまっすぐ進もうとすると研究ができないってことに気付いたんですよ。

2. 森嶋通夫との関係

長津 選択の問題に行く前に最初に伺いたかったのは、そもそも経済学を専攻することになったきっかけと森嶋通夫（1927–2004）との関係についてです。おそらく英語圏の読者にとっては、LSE で教鞭を取っていた森嶋は馴染みがあると思うのですが。安富さんは森嶋の著作を日本語に翻訳したりもしています。⁵⁾

安富 そうですね、私は LSE における森嶋通夫の最後の弟子だと思います。私が 97 年に帰国した後に、ご病気になられたんで、おそらくそれから後に森嶋先生に学んだ人はいないから。森嶋通夫の最後の弟子だっていうのは、多分英語圏でも通じやすいかもしれん。

長津 僕は LSE に 1 年いながら不勉強でよく分かってないんですが、森嶋通夫の研究について少しお聞かせ下さい。日本出身で英語圏で活躍した経済学者には宇沢弘文（1928–2014）や青木昌彦（スタンフォード大学、1938–2015）など他にもいますが。

5) Michio Morishima (1969), *Theory of Economic Growth*, Oxford: Oxford University Press. 安富歩他訳『経済成長の理論』（森嶋通夫著作集 3）岩波書店、2005。Michio Morishima (1992), *Capital and Credit: A New Formulation of General Equilibrium Theory*, Cambridge, UK: Cambridge University Press. 安富歩訳『新しい一般均衡理論：資本と信用の経済学』創文社、1994（『資本と信用：新しい一般均衡理論』（森嶋通夫著作集 4）岩波書店、2004）。

安富 森嶋さんがなぜ成功したのか、私もよくわからないんですけど。

長津 一般均衡の総まとめをされたと理解していますが。

安富 そう。やっぱり森嶋先生が有名になったのは、一般均衡論の初期の、Debreu とかの次の世代ぐらいなんですよ。動学化するっていう、動学的経済学、動学的均衡論っていうのが思考されていた最後の世代だと思うんです。その時にその動学的な研究の先頭を走っていた。多分それで有名にいられたと思うんですけど。それでイギリスへ行った。イギリスに行かれたのは、日本の大学にいられなくなって行ったんですよ。京大でまず喧嘩して、阪大行って阪大で喧嘩して、で、もう日本にいられないって言って、いたくないって言って、それでイギリスに行かれたんですね。で、イギリスに行けたのは、動学的一般均衡論っていうものを打ち立てようとしたから。その初期の研究、特にフォンノイマン・モデルっていうのを完成したんですよ。でも彼が決定的に有名になったのは、マルクスの経済学です。マルクスを、フォンノイマン・モデルの上に乘せたんです。⁶⁾

長津 Bowles とか Gintis とか、そういう人も分析マルクス主義みたいな感じで、マルクスをゲーム理論とかの上に載せたりしています。

安富 その前の世代ですよ。マルクス経済学の数理化っていうのは柴田敬（京都大学、1902-1986）がおそらく先駆者で、それから置塩信雄（神戸大学、1927-2003）と森嶋通夫の2人が、マルクス経済学の数理化を独立にやった

6) 森嶋の一般均衡理論に関する貢献は、『動学的経済理論』（森嶋通夫著作集1、元は1950年の日本語著作）、『均衡・安定・成長』（森嶋通夫著作集2、元は1964年の英語論文）、『経済成長の理論』（森嶋通夫著作集3、元は1969年の英語著作）を参照。マルクス経済学に関する業績は、『マルクスの経済学』（森嶋通夫著作集7、元は1973年の英語著作）を参照。

んですよ。でも最初に徹底的にやったのは置塩信雄です。⁷⁾でも置塩さんのモデルは全部単線モデルなんですよ。結合生産 (joint production) のないモデル。だから数学的にすごくシンプルで、連立方程式で解けるみたいな形に絞って議論をずっと進めて、素晴らしいと思いますけど、その中でマルクスの基本定理っていうのを証明したんですよ。「搾取なければ利潤なし」。森嶋先生はそれとは別に、フォンノイマン・モデルの上にマルクスを置くっていう研究をやって、その上で、その同じ基本定理を証明したんです。で、多分独立なんだと思うんですけども、置塩先生と森嶋先生は知り合い、仲良しだから多分影響を受けてたんだと思うんだけど、森嶋先生は意図的なのか意図的でないのかわかりませんが、それは忘れてたから、全然気付かないで、独立にイギリスで証明したんですね。このマルクスの数理化っていうのが、まだソ連があった頃で華やかだった頃だから、めちゃくちゃ論争の焦点になったんです。それで有名になられたんだと思うんですよ。

長津 英語圏でもそれが重要だったということでしょうか。

安富 Samuelson とかも議論してたんでね、マルクスの数理モデルとかは。

長津 宇沢の経済成長モデルも、例えば労働と資本とか分けたりなんか、当時の成長モデルにもそういうマルクスのな枠組みがあります。

安富 そうですね、2 部門モデルで、宇沢さんは2 部門モデルっていうので、あれも2 部門の動学理論ですよ。だから、あの世代の日本人で数理的に成功されたのは、多分多部門の経済成長モデルっていう分野だったんじゃないかと思うんですけど。

7) Nobuo Okishio (1963) “A Mathematical Note on Marxian Theorems,” *Weltwirtschaftliches Archiv* 91, 287–99. 正の利潤率と搾取の存在を結びつける「マルクスの基本定理」は、「森嶋・シートン・置塩の定理」とも呼ばれる。

長津 やっぱ僕らぐらいの世代になってくるとピンとこないんですが、確かに情報の非対称性で有名な Akerlof もやっぱりマルクスのなフレームワークでモデルを作ったりしていますね。それはその時代性なんでしょうか。

安富 でも置塩先生は完全にマルクス主義者なんですけど、森嶋先生はフォンノイマン主義者なんです。フォンノイマン・モデル⁸⁾に全てを載せるっていうアプローチだから、その後に、ワルラスの経済学とリカードの経済っていう本があって、それぞれ全部、このモデル上にワルラスとリカードを載せてるんですね。⁹⁾

長津 フォンノイマン・モデルの方が数学として優れてるという理解でいいんでしょうか。

安富 結合生産を処理しているんですよね。フォンノイマン・モデルっていうのは、機械と労働力と原材料を放り込んで、古くなった機械と生産物が出てくるっていう風に記述するんです。だから機械を関数にして原材料を入れるんじゃないんですよ。

長津 物理的というか、普通の経済学的なモデルとすごく異質だということでしょうか。

安富 普通のモデルは機械の方を関数にしちゃいますよね。するとその関数が古くなるという問題をどうやって扱っていいかわかんなくなるんじゃない。そうすると資本の問題が扱えなくなるんですよ。だけど資本と原材料とを投

8) John von Neumann (1945-1946), "A Model of General Economic Equilibrium," *Review of Economic Studies* 13(1): 1-9. (元は 1937 年のドイツ語論文)

9) 『ワルラスの経済学』(森嶋通夫著作集 9、元は 1977 年の英語著作)、『リカードの経済学』(森嶋通夫著作集 6、元は 1989 年の英語著作)。

入して、古くなった資本と製品が出てくるっていうモデルだったら、ちゃんと資本を記述していけるんですよね。

長津 それが動的なモデルの核なんですか。

安富 森嶋先生は、その結合生産っていうか、資本の問題を無視した経済学では意味がないって、資本主義なのに資本無視するとか意味ねえじゃんっていうお考えだったから。この資本の取り扱いっていうのが原理的に可能なのはこいつだけなんで。それで、フォンノイマン・モデルっていうものの上に、いろんなものを載せていかれたんです。

長津 そういう手法自体が今経済学に残ってるっていう感じはないですよね。

安富 あんまりないんですよね。なぜかって言うと、結局難しすぎて、何やってるかわかんなくなるんですよ。だって根本的問題としては、古くなった資本っていうものを生産物扱いするわけじゃないですか。資本と原材料を投入して、生産物と、古くなった資本という生産物を。そうすると、生産物と古くなった資本、対等になって見分けつかないんですよね、実は。そうすると、こっちは資本でこっちは生産物ですっていう記述は後から入れないといけないんですよ、結局は。で、そうしたら、じゃ、これどうして。っていう問題が発生するんです。

長津 だから経済学は基本的に非物理化するっていうか、主観的な概念、例えば資本っていう概念も、割引された現在価値というような捉え方をするんでしょうか。

安富 そうなんですよ。結局森嶋先生は、リカード的な物的再生産のイメージを維持した最後の経済学者だと思うんですね。

長津 そこから物が消えてしまった。

安富 今の経済学にモノはないじゃないですか。

長津 それは Margaret Schabas (2005)¹⁰⁾ が、denaturalization of the economy という言葉で、新古典派を歴史的に説明している話と一緒に思うんです。choice の科学になったってことですよね、結局主観的選択の科学になった。

安富 それで、その多部門モデルそのものが、経済の実体とともに経済学から消えてなくなったんですよね。私は、その消えてなくなる直前の時代に大学生、大学院生で、マルクス系、世界経済論の経済学者、本山美彦 (1943-) 先生のゼミだったので。でもそのゼミでは、マルクスもケインズもリカードもミクロ経済学も、平等に読んでたので。その中で私がすごく説得力を感じたのが、置塩信夫と森嶋通夫の作品だったんですよね。

長津 でも最終的に経済学の枠組みの中ではさっき話した理由でそれらのモデルは採用されなくなった。

安富 もし森嶋－置塩タイプの数理モデルとかが生き残っていれば、そっちの分野の研究者だったかもしれないですけど。私が大学院に入った頃にはそれって誰もやってないっていう感じで。で、たまになんか2部門のフォンノイマン・モデルがリバイバルしたりする。何言ってんのって。60年代にn部門になってるのに、なんで2部門に減らすんですか、みたいな。

長津 フォンノイマンっていう理論家に注目すると、僕が知っているフォンノイマンっていうのは、ゲーム理論や期待効用理論を確立したフォンノイマ

10) Margaret Schabas (2005), *The Natural Origins of Economics*, University of Chicago Press.

ン¹¹⁾ なのですが、そっちの方はなんか生き残ってるというか。

安富 そうなんよ。なんか主観の方は生き残ってるんですけど、物的再生産の方は生き残ってないですよ。

長津 でも実はフォンノイマンの期待効用仮説も、もともと確率が主観的じゃないって話もあって。Subjective Expected Utility Theory は Savage¹²⁾ によって完成されてから数理心理学とか意思決定理論の方に広まったので、もしかしたらフォンノイマンが考えていた枠組みは主観的なものとは違ったのかもしれないですね。物理の人だし。

安富 そんなこと考えてないと思いますよ。というか、人間のその期待形成も物理的過程だって彼は考えたと思うんで。ゲーム理論っていうのはそもそも主観の理論じゃないと思うんですよ。人間が思考してるように見えてるけど。単にそれは、複雑なその相互関係の中で計算してる［ように見える］だけであって。その計算過程そのものは数理的過程にすぎないって信じてたから、ああいうモデル作ったんだと思うんですよ。

長津 Samuelson とかの後にゲーム理論が経済学を席卷して、完全に大学院のミクロの教科書が半分ゲーム理論みたいな状態になってしまった。それでもやっぱり von Neumann 的な見方が浸透したわけではないってことですね。

3. 計算量爆発

安富 私がそういう、ミクロ経済学のゲーム化とか、ミクロ経済学そのものを

11) John von Neumann and Oskar Morgenstern (1944), *Theory of Games and Economic Behavior*, Princeton University Press.

12) Leonard J. Savage (1954), *The Foundation of Statistics*, John Wiley.

信用しなくなったのは、計算量の問題っていうのに出会ったからです。塩沢由典（1943-）さんが最初に日本で—もしかしたら世界で初めてかもしれないけど—計算量爆発という問題があるから最適化って不可能だよっていうことを、『市場の秩序学』（1990）で指摘されて。私はちょうどその頃に複雑系科学っていう分野に入って、コンピューター・シミュレーションを自分でもやるようになったんで。計算量っていう問題がどれほど大変かっていうのを身に染みて感じてたので、最適化とか、ゲームの均衡解とか、そんなあってもないのと同じだからっていうのはもう当然、計算っていうプロセスに手を染めた人間にとってはもう当然のことなんですよ。

長津 その経済学の非現実的な前提に関して、安富さんは『経済学の船出』（2010）第三章附論において松尾匡（1964-）〔置塩信夫の弟子〕による、非現実的な前提をベンチマークとして理念型を作るために導入しているにすぎないという擁護を批判されています。¹³⁾ 松尾さんとのやりとりが非常に示唆に富んでいたんですけど、今でも、経済学者がこの問題に向き合わないっていうのは、理論というか、枠組み全体の盲点だから、もうそこは対話不可能という風にお考えですか。

安富 だと思いますね。だって、その本で主張してるように、まず、希少性原理があるじゃないですか。ミクロ経済もゲーム理論も希少性原理と最適化原理の上に乗ってるじゃないですか。希少性を要請するっていうことは、熱力学第2法則を受け入れてるってことですよ。熱力学第2法則を受け入れないと、第2種永久機関が作れてしまうから、あらゆるものをコストゼロで生産できるようになってしまうので。希少性を受け入れるってことは、熱力学第2法則を受け入れてるということで、熱力学第2法則を受け入れてるってことは、観測にコストがかかるってことを受け入れてるってことですよ。観

13) https://matsuo-tadasu.ptu.jp/essay_90406.html で閲覧可。

測にコストがかからないんだったら、分子を見分けることができるので、そうすると、その熱力学第2法則を破れますから。だから観測とか情報とか計算にコストがかかるっていうことを含意してるわけですよ、希少性原理は。それを受け入れたら、最適化原理破れますよね。だって、最適化しようと思って計算したらコストがかかっちゃうんだから。そうすると資本の賦存状態が変わって初期状態が変わってしまうわけですよ。

長津 特殊な条件を設定して、実験経済学とかで均衡を出現させるっていうことは可能なんですけど、そのことと、意思決定してる人たちが最適化してるっていうのとは、なんか切れてる現象ですよ。

安富 それ、さっきの話と同じなんです。原理的にそこに解があるかっていうのと、解を見出させるかってのは全く違う話なんですよ。だから、初期状態で最適解に行こうと思ったら、コストがかかっちゃうと希少性原理は要求してるので。だから最適化原理と希少性の原理は矛盾してるんですよ。この議論に私、穴があるとは到底思えないんですよ。

長津 それでも、例えば松尾さんのように、最適化する意思決定者はベンチマークだから、それを最初に近似として想定して、後からもう少し現実的にすればいいという方法論は、行動経済学の人も同じ言い方をするんですけど。

安富 でもそれ、どんだけ離れてると思って。

長津 経済哲学者として著名な Robert Sugden は、行動経済学者でもあるんですけど、最終的に選好理論で前提されているような人間の選好なんてものはないっていう身も蓋もない結論を述べています。¹⁴⁾

14) 例えば以下を参照。Sugden, R. (2021). “Normative Economics without Preferences,” *International Review of Economics* 68(1), 5–19. <https://doi.org/10.1007/s12232-020-00356-8>

安富 私も同じ結論に到達しています。

長津 そうなんですよ。そもそも行動経済学っていうのはそういうラディカルな学問だったはずなんですけど。

安富 私が複雑系科学をやりだした頃に実験経済学が始まったんですよ。やってるの見てね、それは均衡解と何も関係もないことをやってるから、それをやったってこっちとは関係付けられないのになぜ気づかないんだって、実験経済学の人にだいぶ言ったんですよ。

長津 それは市場実験みたいな実験ですか。

安富 いろんな実験。学生に紙配って色々やってたりしてたじゃん。あれがスタンフォードとかで始まって、日本もやり始めたんですよ。やり始めた人たちに、実験に意味はあるけど、均衡解とは何の関係もないよね。だから、ミクロ経済学とかの修正とか批判にはなっていないですよ。全然関係ないということを知るんだったら、私がやってる研究とすごく親和性が高いんですよ。話をしたんですけど。コンピューター・シミュレーションで貨幣を研究するのと実験経済学はすごく近い。計算に時間がかかって。けれども計算に時間かからないっていう荒唐無稽の理論とは何の関係もないんだから、そっちを意識しながらそのモデル作って実験したって何の意味もないですよ。って言ったんですけど。話通じなくて怒り出したりしました。

長津 エージェント・ベースト・モデリングとかのエージェントが実際の学生だという風に考えれば、いろんな系を実験室で作って、その振る舞いを見るっていうことができますよね。

安富 非線形的な数理コンピューター・シミュレーションと実験結果がどのぐ

らい合うかとかっていう実験ができるんですよ。

長津 経済学の中でも色々分かれていて、行動経済学者は最適化モデルの修正に固執したんだと思うんですけど、メカニズムデザインとか、そっちの方に行った人は、そもそもシステムを作るっていうことに興味がある人たちで、例えばマッチングメカニズムとか、オークションとかを、人間を駒として使うみたいな。ある意味、構成主義的な経済学だと思うんですけど、そちらの方と親和性があるっていうことなんですかね。

安富 でもそういう人たちって、なんか「いいもの」を作るとかっていうことを考えるんですよ。昔の話ですよ、どうやったらより優れた制度設計できるかとかいう議論をしてるんですけど。

長津 例えば、医学部を出た研修医と病院を、研修医が予め表明した選好をいかに満足させる形でマッチングできるかとかですね。

安富 そういうのは、理屈では無理だになってというのが、私の考えです。なぜかって言うと、その人間の行動特性とか文化的背景とかにめちゃくちゃ依存するんで、そういうものから自由な理論を実験に基づいて作り出すってのは、これはもう荒唐無稽であるっていう風に思います。人間社会のダイナミックスを理解する実験であれば、意味があると思うんですけど、いい方法を提案しようというのは無理だよねって、それは企業家に任せましょうよ。経済学者がやる仕事じゃないよねっていう。

長津 最近は企業家と経済学者の境界もかなり怪しくなっていて、Airbnb、eBay、Walmart 等が実験経済学者をチーフエコノミストに雇ったりしています。そういった例はどうなんでしょう。

安富 ほとんど役に立たないですよ、経済学者が持つて知識とかっていうのは、そういうことに。少なくとも、私が90年代頃に持つていた経済に関する経済学者が持つてた知識で、そういうことに役に立ってはいなかったです。今はあるのかもしれませんが。

長津 最近の潮流では、経済学において理論の役割が相対的に減り、ビッグデータなどに基づくことが経済学の信憑性に寄与しています。

安富 ちょうど私が院生の頃に、ブラック・ショールズ理論とかが流行りだしたんですよ。それ何と思って調べたら、正規分布とか、そういうのを前提にしてるんですよ。それで、私は何馬鹿なこと言ってんですかって。経済現象っていうのはべき分布するんだから、平均すらとれないのに。そんなものに、その平均が取れて分散があるようなものを当てはめたら、必ず失敗するよって言ってたら、リーマンショックが起きたんですよ。

長津 社会学者のドナルド・マッケンジーもブラック・ショールズ理論についてのケーススタディをしています。¹⁵⁾

安富 そもそも荒唐無稽なんですよ。J. P. モルガンが言ってるんです。「人は卵をバスケットに分けて、分けると安全になるって言うけど、間違ってる。卵は1つのカゴに入れて見張ってないといけない」とJ. P. モルガンが言ったって書いてあったのを読んで、すごい感銘を受けたんですけど¹⁶⁾。正規分布、平均も分散も取れないから、1つを集めて人間が見張って、危なくなったらよけて動かしたりしないといけないよってJ. P. モルガンが言ってたわけなんですよ。学生時代にそのJ. P. モルガンの言葉を読んでいたので、

15) MacKenzie, D. (2008). *An Engine, not a Camera: How Financial Models Shape Markets*, MIT Press.

16) 竹内謙二(1969)『金持になる方法の研究』日本評論社。

ブラック・ショールズの出て来た時、いや、それ J. P. モルガンがダメって言ってるじゃん、と思いました。

長津 ノーベル賞貰いましたけどね。¹⁷⁾

安富 そうそうそう。でもやっぱりダメだった。

長津 今おっしゃったような問題点は、ビッグデータとか AI とか、データが大きくなってきたんで、あんまりもう理論いらないじゃないかみたいな議論とどう関係するのでしょうか。

安富 それが疑わしいのは、ビッグデータから抽出する、AI が抽出するのも理論なんです。人間にはよく見えないけど、変な理論を作ってるんです、AI は。それは、過去のデータが正しければ正しいんですよ。だけどシステムっていうのは、どんどん変化するから。「ミネルヴァの梟」であることには変わりはないんですよ。だから AI も、過去のデータに関してはモデルを作れるんだけど、未来の状況については対応できない。でも人間社会に発生する構造って、必ず背後にものすごい深い非線形性を持ってるから、どこかで構造的転換を起こしちゃうんです。そうすると対応できなくなるという点で、ブラック・ショールズ・モデルと全く同じだと思います。

4. 科学・認知の限界と人間の力

長津 今の点は、認知の限界をどういう風に見極めるかっていうことに関係すると思うんです。自分の持ってるツールが間違ってるって言われても、これより良いものがない以上、しょうがないって言ってやり続ける以外の選択肢

17) Robert C. Merton と Myron S. Scholes は 1997 年にノーベル経済学賞を受賞。授賞理由は「金融派生商品の価値を決定する新しい方法に対する貢献」。

は科学者にはなかなか難しいんじゃないでしょうか。

安富 その通りですね。それが人間というものの持つてゐる、なんか限界なんですよ。

長津 どのように認識の限界を見切れればいいのでしょうか。

安富 私たちが依存してる最強の計算システムは、やっぱり人間なんですよ。人間の身体なんですよ、と私は言っています。60兆個の細胞がコミュニケーションしながら計算してるシステムって絶対作れないんで。

長津 人間とか体とか感覚とかに対する信頼が失われて行くのが科学、特に経済学の歴史なのかもしれません。経済学は科学的になろうとして頑張ってきたせいか、進化経済学、複雑系経済学、エコロジカル経済学等の所謂 Hetrodox 経済学を含めて、そういう身体という発想に向かう経済学っていうのは、僕はあんまり知らないんですけど。

安富 それで、私が考えるようになったのが、ヴィトゲンシュタインの神秘に関する見方なんですよ。あれは結局、語りうる範囲っていうところに線を引くじゃないですか。語り得ぬものっていうのがあってことを受け入れようよ。それは神秘と呼ぶわけですよ。で、語りうる範囲については語らねばならないけれども、語り得ぬ範囲については語ってはならない、沈黙せねばならないっていう原理、やっぱ私は真面目に受け止めるべきだと思っていて。

長津 しかし近代科学的な観点からいくと難しいですよ。だから複雑系とか非線形とかとか言ってる人たちの中にも違いがあつて、違う数学を使えばいいんだっていう発想もあると思います。

安富　そうですよ、多数派はね。複雑系科学とか言ってる奴って、その多くが単純系人間なんですよ。「複雑な数学を使えば、複雑な現象も理解できる。」違う。結局そこなんです。語りうるものは語りうるし、語り得ぬものについては沈黙せねばならないって原理を受け入れるかどうかってところが決定的だと思うんですね。で、受け入れたらどうなるかっていうと、結局その神秘的なものによって私たちは支えられてるっていう原理を受け入れざるを得ないんですよ。神秘って言っても別に神とかそういうんじゃなくてね。私たちの身体が持つ計算能力とかなんです。だって、人体の60兆個とか数十兆個の細胞が、百兆個以上の微生物と共生しながら再生産しているシステムなんてものをですね、人類が構想するのは不可能です。生命、人体ってのはそういうもんなんです。だから人体とかが持っているその計算能力っていうものを言葉で表現したら、神秘になると思うんです。

長津　ヴァイトゲンシュタインっていうのは、哲学においては一つの参照点だと思うんですけど。それを科学者に対してどういう風に伝えればいいのでしょうか。

安富　私が、それを本当に信じるようになったのは、上田皖亮（1936-）の発見した不規則遷移現象（1961）¹⁸⁾ がきっかけです。後に「決定論的カオス」という間違った名前では呼ばれるようになったけれども、不規則遷移現象が発見者がつけた正しい名前です。で、すごく大きなポイントがあって、上田先生はね、現象って名前をつけられたんですよ。決定論的カオスってのは、不規則遷移現象の背景には決定論的カオスがあるっていう実体化なんです。そうすると、つまり決定論的カオスを数理的に理解すれば、不規則遷移現象が手に入るっていう、例の私が「神秘的な合理主義」と呼んでるやつになっ

18) 林千博・柴山廣・上田皖亮（1961）「周期的外力を加えた自励振動系に発生する概周期振動」電気通信学会 非直線理論研究専門委員会資料、1961年12月。上田皖亮（2022）『不規則遷移現象論』日本印刷出版。

ちゃうんですよ。ほとんどのカオス研究者は神秘的な合理主義者なんです。実体論者、実体化論者なんです。上田先生だけが、おそらくは不規則遷移現象を現象論として捉えてるんですよ。私もそれは把握不可能な現象として捉えています。そこが日本の複雑系研究の1つのポイントだったと思うんですけど。でもね、やっぱり欧米の研究者はね、やっぱりそうはいかないんですよ。デザイン的神秘主義を受け入れられない人が多かった。で、受け入れた瞬間にね、どっかあっちの世界行ってしまうんです。タオとか言ってる。

長津 あー、なんか東洋思想みたいな感じ。

安富 ヨガとかし出したりとかするようになるっていう、そこじゃないよねって。

長津 サステナビリティ科学でも、近代科学的世界観に対する反省は言われていますが、おっしゃるような合理的な神秘主義という観点はなかなか出てこないですよ。

安富 来ない。面白いね。なんでか知らないけど、みんな、日本人もそうですけど、いわゆる、極端な科学主義、私が「神秘的な合理主義」と呼ぶ、合理主義さえあれば、なんでも解決するんだっていう、神秘主義的な人たちが一方にいて、それはおかしいっていうと、急に純粋な神秘主義者になるっていう。

長津 安富さんのような立場は心理的に不安定というか、居心地が悪いと思うんですけど。

安富 神秘の上に座るっていうことは、やっぱり難しいみたいで。でもそれ以外はないですよ。だって、私たちの身体が教えてくれるもの以上のものを必要とするような場面があるとしたら、もうそれはどうしようもないので。だから、私たちの身体が教えてくれるものの範囲内で解決できることは、私たち

に解決できるんですけど、私たちの身体が教えてくれる範囲内ではどうしようもないことが起きる。例えば小惑星が地球に衝突するとか言ってもどうしようもないので、どうしようもないから、その時はもう滅ぶしかないっていう。けど、私たちの身体が教えてくれる範囲内で、なんとかなることはなんとかしたい。それがマックスだろっていうことが、どうしてそんなに変なことに聞こえるのか、よくわかんないんですけど。

長津 理性の限界っていう話は、20 世紀の分析哲学の結論だという総括も可能かとは思います。

安富 ヴィトゲンシュタイン的にいうと、論理を成り立たせてるのはなんですか？ かつつたら、神秘なんですよ。でも、ラッセル的な考えでは、論理を成り立たせてるのはメタ論理だ、メタ論理を成り立たせるのはメタメタ論理だと。ほら、メタメタメタメタメタってずっとやっていけばいいんだよって言うんだけど、いや、それ、ずっとメタメタメタメタメタメタっていうやつは神秘じゃないんですか。って私は思うんですけど、もうそんなメタメタしてるやつ、人間には取り扱い不可能だから、そこは神秘ですよって。

5. 共同体概念と秩序の源泉としての人間

長津 その点に関して、安富さんは西洋の枠組みでは、例えばクリプキやマッギンの規則に関する議論にすら「共同体」が持ち出されると指摘しておられます。¹⁹⁾

安富 面白いところで、ヨーロッパ的思考では、必ず共同体が出てくるんですよ。選択の果てるところに共同体が現れるんですよ。あれはだから実体化ですよ。神秘を実体化したやつが、共同体なんですよ。

19)『経済学の船出』第6章「コムニス (commūnis) からの離脱」

長津 規則に従うということの底が抜けていることが明らかになった場合、複数の人がその規則の解釈に合意してるという考え方は、ごく自然に出てきそうだと思うんですけど。

安富 だけど誰も合意なんかしてないですよね。共同体において。

長津 そうですね。諍いが起きてないというか、物事がうまく進んでいるっていう意味において合意があるっていうことでしょうか。

安富 それは合意のせいじゃなくて、物事がうまく回ってるだけのことであって。その「うまく」って何といたら、ちょっと一皮剥けばなんかめっちゃくちゃなこととか起きてるんだけど。ジャーニーズとかみたいな感じで。強姦されても、それはいいでしょうって。合意してるっていう。いや、合意誰もしてないから。

長津 共同体という概念が、市場の対概念として強固にあるというのはご指摘の通りだと思います。

安富 そう、これがやっぱり、私が英語から逃れる必要を感じた最大のポイントでしたね。あるものを共有することによって秩序が生まれるみたいな概念がやっぱり言語に入ってるんですよ。

長津 それがバイアスだっていうのは、民俗学や人類学、非西洋の歴史とかを学ばれる中で気づかれたのですか。

安富 直感じゃないですかね。合意とかした覚えがないっていうか。日本人として普通に育ったら選択とか合意とかしないですよ。大学に入るまで選択と

か合意とかしないと思うんですよ。それはやっぱり自分の生活感覚っていうところから来てる。合わないんですよね。「選択って何？したことないんですけど」みたいな感じで。でもヨーロッパ社会で生まれ育つと、選択とか合意があるような気がするんじゃないですかね。子供の時から。

長津 そうですね。逆に責任とかの概念もそこと繋がってるんで。

安富 そうそう。選択も合意もしてないのに、責任とかあるはずねえだろうっていう。

長津 僕も大学に入って、カントを刑法とかドイツ法学とかで習う過程で「自由意思」とか出てきて。

安富 うん、あの一、ビビりますよね。いや何もしてないのになんで罪に問われるんですかみたいな。

長津 最近の脱成長とかの文脈でも市場ではないもの、貨幣を媒介としない関係性としての共同体というのが措定されているように見受けます。それは間違った対概念だとしても、安富さん自身も、貨幣的な関係の結び方が支配的になると、そうでない関係性が侵食されるという crowding out については論じられています。²⁰⁾

安富 侵食されてるのは、各自の技芸なんですよ。生きる技法、技芸なんです。能力なんです。選択とか共同体っていう概念で無視されてるのは、その1人1人の能力なんですよ。個々の人間が自分の周りを秩序化する能力を持っているっていうことが、社会秩序を形成する原理のはずなんです。

20)『経済学の船出』第二章「無縁の原理と平和条約としての価格」

長津 それは社会秩序を考えるヨーロッパの枠組み、例えばホッブス等とは全然違いますよね。

安富 そうなんです。それは結局、人間に秩序を作り出す能力なんかないっていうところからスタートしてるんですよ。

長津 関連してアダム・スミスの道徳感情論についても批判されています（『生きるための経済学：〈選択の自由〉からの脱却』第7章、2008年）。

安富 あれはすごく面白いモデルですけど、つまり、人に自分がどう映ってるかってことを気にするっていうことを秩序の根源だと思ってるんですけど。

長津 ある意味日本人っぽい見方だと思いますが。

安富 けど、もうそれがすごい無責任を生み出すことは、日本社会に住んでればよくわかりますよね。見た目っていうのに命かけてる人たちほど、暴力的な人たちはいないので。

長津 社会規範の内面化というのは Gintis 等によっても重視されていますが。

安富 ところが、[日本には] その規範もない。だから、それがすごいやばいと思うんですよ。ユダヤ教的な考えでは、律法を内面化していくんですよ。

長津 それに対して安富さんのお考えは、秩序が自発的に生成するという発想なんですか。

安富 人間が秩序を生み出す。人間には人間社会において秩序を生み出す力が

あるっていう主張です。それがないとしたら、人間社会や人類はとっくの昔に滅んでたと思いますけど。人間には人間社会を秩序化する力があって、それぞれにみんながその能力を発揮すると、社会が秩序化されるということは、ただの当たり前には思えないんですけど。

長津 社会理論として、自由主義的であるとか保守的であるという枠組みにも収まらないお考えだと思います。

安富 それはね、すごい儒教的な考えなんですよ。選択の自由っていうのを重んじるっていう意味でのリベラルではないし、共同体のルールを重視するという意味の保守でもないです。共同体とかルールとかに従え、とか言ってるやつは秩序を生み出したりしないです。そんな気ないんだって。秩序は外にあるんだから。「私が秩序を生み出すとか訳の分からないこと言わないで下さいよ」って。「私は秩序を乱してないんですからそれで許してください」っていう話になるので。これを正面から言ってるのはガンディです。「罰を恐れて正しいと思うことができないような人間に、秩序なんて生み出せません」って。

長津 儒教的、東洋的っていう括りもできますか。

安富 多分東洋的なんでしょうね。キリスト教的な枠組みではイエス・キリストっていう人自身を個人だと思わないんですもんね。彼を秩序の源泉とかとは思わないんですよ。だって神の言葉を伝えてるだけだから。なんかそういう人間の身体性みたいなところに対する否定から始まっているのかもしれないですけど。そこはよくわからないですけど。猿山に秩序があるのは、猿がやっぱり秩序を生み出す力があるからですよ。どう考えても。

長津 そうですね。ボス猿がいたりして。

安富 ボス猿がいたってダメじゃないですか。全体にそれぞれが合わせて行動してるから秩序が形成されるのであって。もしも猿にそういう気がないんだったら、秩序は生まれませんよね。だから、それぞれの動物には、それぞれの群れを作り出して秩序化する能力があるんですよね。だから、そういう能力を欠いてる動物は、群れを作ったりしないんですよね。人間はやっぱり何らかの形で秩序化する能力を持ってるんです。だから群れを作って、なんか異常に高い能力を持ってるから巨大な社会とか作ってるんですけど。

長津 持続可能性の危機を、人間が協力しあえない「囚人のジレンマ」として定式化することがよくありますが、逆に共同してこれだけの大量破壊を行い得ることが問題なんだという見方もできると思います。

安富 でも、それはすごい危うい。そして危うくなってる理由のひとつは、個々人の秩序形成能力っていうもの、生まれてすぐは持ってないけれども、子供が大きくなるにつれて発揮し始める秩序形成能力を軽んじて、外部的に秩序を押し付けてるって認識している基本的な教育論にある。子供が自分で秩序形成能力を発揮し始めてるとは捉えないんです。子供は無秩序な存在で、外部から秩序を叩き込んで秩序化するっていうのは、基本的なヨーロッパ的な教育論で、今も世界中を席卷してますけど。秩序があるから秩序を叩き込んでるわけなんですけど、じゃあその秩序はどこから来たんですかといったら、やっぱり最初は人間から出てきたはずなので、だから人間が秩序を生み出しているわけなんだから、人間には秩序を生み出す力があるはず。それ以外考えられないのに、それを神から降ってきたみたいに捉える。

長津 でもそれは、かなり人間を信頼しないとイケないっていう意味では、ハードルの高い考え方なんではないでしょうか。

安富 非常に儒教的なんですよ。なんで私はこんな風に考えるんだろうって考

えたんですけど、やっぱりそれは儒教的伝統の中で生きてたからなんでしょうね。あるいは東洋的、日本的伝統なのかもしれませんが、人間以外に秩序を作り出すものがないよねっていう言説は。人間以外に、個々の人間以外に秩序を生み出せる人なんていないですよっていう言葉がですね、日本社会だったら、それはまあそうだねっていう形で通じるかもしれない。ですけど英語圏だとダメなのかもしれない。ひょっとするとね。

長津 それは Anarchism が危険だと認識されているという意味で正しいのかもしれませんが。僕は安富さんの思想が anarchist とされる David Graeber と親近性があると感じています。例えば *Bullshit Jobs* (2018) における労働価値の分析は安富さんの関所経済の分析（『経済学の船出』第5章）と通じるものがあると思います。彼は人類学者でフィールドワークももちろんしています。

安富 人類学的フィールドにいたらね、ブルシット・ジョブとかないんですよ。そんなことしたら、会議とかしたら死んでしまうので誰もやってないんですけど。確かに社会を営む上で党派間の争いとかが起きてそれを調整する必要があるというのはもちろんそうなんだけど。でも個々人から秩序形成能力を奪い去ってしまったら、無秩序になりますよ、そりゃね。最近知ったんですけど、ヘーゲルの自由論ってありますよね。法の哲学で欲しいままにするっていう自由と、それを否定する秩序との間に、愛っていうもの、他人を他人のためにするっていうことが、自分の欲望の中に入っている。愛とか友情とかっていう風に言って止揚するわけですけど。あの考えっていうのは、私は多分東洋的な何かの影響じゃないかなと思ってますけど。それがヘーゲルの中にドーンとあるんだけど、それはマルクスによって馬鹿にされて、革命論になっちゃったんですよ。でもヘーゲルは東洋のことすげえ馬鹿にしている。本は書いてるけど、書いてるだけ関心はあったわけですよ。そういうものに接してるうちにそういうことを思いついたんじゃないかなって気もしなくもないんですけど。

長津 人間による秩序化という発想は普遍的なものとも考えることもできるかもしれませんが。

安富 西洋にも当然あったと思いますよ。というか普通の考えだと思うんですよ。個人に秩序形成能力があるから秩序はあるっていうのは、そうじゃないと考える方が難しいじゃない。

長津 これは Graeber と Wengrow が近著で批判している考えですが²¹⁾、150 人くらいの単位の狩猟採集グループではそれでいいが、農耕が始まり人口が増え社会が複雑化するとそれではうまく行かなくなって、トップダウン的な仕組みが必要になるという単線的な人類史観が主流です。

安富 それでうまくいかないから別のモードが必要だという考え方自体はオッケーなんです。だけど、うまくいかないから別のモードが必要になったら、もうそっち「個人の秩序形成能力」はいらない、はないですよ。でもヨーロッパ近代言説においては、個々人の秩序形成能力はもうなくていいっていう、そんなものは信頼に値しない、暴力しか生み出さないっていう、そういう前提があるような気がするんです。

長津 経済学の文脈では、合理的選択をする行為者を想定して、誘因つまり税金と補助金、あるいはナッジによる政策介入でシステムを動かしていこうという発想が支配的です。

安富 できるわけないだろうってね。猿を操作しようとして餌やっても、ろくでもない猿にしかならない。

21) D. Graeber and D. Wengrow (2021), *The Dawn of Everything: A New History of Humanity*, London: Allen lane.

6. 学際的な研究の方法と盲点の共有

長津 安富さんの研究方法は、歴史、コンピューター・シミュレーション、文献解釈と多様で、かつ対象としている分野も社会科学全域に多岐にわたっています。学際的、超域的な研究スタイルを取るに至った理由をお聞かせ下さい。

安富 物事っていうのは互いに接続してますよね。だから例えば化粧品でもいいですよ、こう取り出して、これについて考え出したら、例えばプラスチックについて考えなきゃいけないとか、この鏡のこの反射について考えないといけないとか、光線について理解しないといけないとか、粒子について理解しないといけないとかありますよね。だから何か1つについて考えようと思ったら、あらゆるものがものすごく複雑で、そこに繋がっているわけなので、それが都合よく全部経済学の範囲に収まったりとかするわけないんですよ。だから、何かについて考える、コップについて考えるっていうことをしようとしたら、その素材の元素に戻ってとか言って研究しだすかもしれないけど、でも作った人のことは考えないんですかとか。素材について考えたら、まずこれ隕石になって地球に飛んできたってわけで、みたいなことになるわけですから、何かを知ろうと思ったら必然的にいろんなところに広がりますよね。しかしアカデミックな世界ではそれは許されない。コップについて考えるときは、「じゃああなたどのアプローチで行くんですか。現象学ですか、デザイン論ですか」とか。

長津 安富さんは学際的な研究というものに批判的ですが、それはやられている超域的な研究と異なるのでしょうか。

安富 私は最初は経済学者になろうと思ったわけだし、経済学に没入して選択とか共同体とか、そういう問題、そういう認識を持ったわけです。でもそれに少しでも批判的な言説を取ろうとすると、経済学者はぶち切れるって

う。議論にならないですね、ぶち切れ。あらゆる人がぶち切れるっていう、すごい現象に直面して、松尾匡さんみたいな人ですらぶち切れるっていう。そういう反応。90年代にそういう経験をして、これダメだなって複雑系科学に行って。物理学者って比較的ぶち切れない人たちなんで。さすが学問の中心部だって自分で信じてるだけあって、いかなる議論にも耳を傾けた上で反論しようとするんですね。けれども、やっぱりぶち切れるポイントはあるんですよ。不可知論とか、神秘論とか、そういうことも受け入れないし。例えば、上田院亮先生の不規則遷移現象を、カオス理論とかの複雑系科学者がみんなで見捨ててるんですよね。日本人のくせに。決して言及しないんです。何故かとずっと思ってたんですけど、やっぱり何かに引っかかっているんですね。それは私も正確には言えないんですけど、あるんです。でも「経済学者に比べると」ずっと少ないです。生物学者とかはね、めっちゃめっちゃあるんですよ。まだ正確に言説化できないんですけど。なんか、タブーがあるんです。多分一番大きいのはね、生命には物理現象にはないような何かがあるっていう言説は、すごく嫌うんですよね。生物学者が半分ぐらい、それから物理学者半分ぐらいの、複雑系科学の生命に関するセミナーをして、「生命現象には、物理現象にはない何かがあると思う人？」って質問したら、物理学者しか手挙げない。それから数理生態学は数理生態学でタブーがあるんですよ。共生現象は例外であるって、変なタブーなんですけど。基本は競争みたいな。「競争しようとする」と共生した方が有利ですよ」っていうのは通じないんです。「だって競争する時に、1人で競争するより誰かと組んだ方が有利ですよ。できるだけたくさんの人と組んだ方が有利だから、大きな会社とかあるんじゃないですか。生命もそうですよね」とか言っても通じないです。絶対通じない。「でも身体って共生現象じゃないですか。細胞と細胞が共生してますよね」とかってダメなんですよ。あと遺伝子からタンパクの方に情報が流れるっていう、セントラル・ドグマってあるのがあるんですね。クリックだったかな。セントラル・ドグマっていうのは、あらゆる情報が一方方向に流れる、一切の情報が流れるっていうドグマなんですよ。でも

ね、これは破れてるんです。常にタンパクが遺伝子进行操作することは、いくらでもあるんですよね。エピジェネティックスっていう分野ができるぐらいあるんです。エピジェネティックスがあるってことは、あらゆる情報がっていうドグマも破れてるんですね。でも、あのドグマは、実はあらゆる情報が一方方向に流れないと成り立たないんです。少しでも還流してきたらもうダメなんですよ。ぐるぐるぐるになっちゃうんだから。セントラル・ドグマを無視した論文を生物学の雑誌に投稿したら、必ずリジェクトされる。でもダメじゃんって、少しでも情報が逆流したら、エピジェネティックスがあるってことは、もうセントラル・ドグマが破れてますよねっていう議論は通じないんです。「基本はセントラル・ドグマで例外的にそういうのがあるんです」ってドグマを維持する人々は言うけれども、少しでも例外があったらダメだってクリックが書いてるじゃないですかといってもダメなんですよ。通じないんですよ。この反応は経済学者とそっくりです。

長津 そういう理由で、他分野の人たちと協働しようとしても無理だということでしょうか。

安富 絶対無理だった。誰も協力してくれなかった。それで私は90年代にいろんな人とやろうとして、無理だな、学際研究は不可能である、という結論に達しました。1人でやるしかない。で、1人で学際研究をしてる人同士は繋がれる。何もかも、関心も前提も何もかも違うんだけど、話はできるんです。でも、彼らは大体学者じゃないですね。それは何故かって言うと、分野というのは対象で決められてるっていう風な間違った認識があって、これを受け入れてないと、学者として認められないっていう根本タブーがあるんです。でも正しくは、分野はタブーによって形成されている。タブーの暗黙的共有によって分野が形成されてるってのが正しいんです。これはまさに人類学者の発見したことなんです。タブーっていうものがあって、部族は成り立ってる。で、タブーを犯すと命を奪われる。これを19世紀の人類学者が

発見したんですが、現代のアカデミズムってのはその理論通りできてますね。タブーに触れると命を奪われる。学者生命を奪われるんです。それに2000年前後に気づいて。学問分野がタブーでできているので、学際研究すると、お互いのタブーを突き合うから、喧嘩になる、できない、ということに気づいたんで、自分でやろうっていうことになった。

長津 制度的、心理的な困難を一旦度外視して考えた場合、逆にそのタブー同士を突き合わせれば、補完的に機能するので認知的進歩が得られるという楽観的な考えが、学際性を押し進める理論的根拠にはなっているのですが。

安富 うん、実際その通りですよ。そのタブーを突かれてハッとして、あ、自分はそういう盲点を持っていたって思える人間同士であれば可能です。でもそうになったら、論文をリジェクトされて、ポストを失うんですよ。

長津 それは心理的というより制度的な障害であると。テニユアを取れない。

安富 そうですね。でもそれを言うならさ、日本の学者なんか全員テニユアですよ。東大教授になったらさ、もういいじゃない。だけど東大教授の方がそういう権化みたいな人ばかりなのは、多分それぞれの猿山における地位を争ってるからだと思うんですよ。学会とかの狭いスクールの中での尊敬っていうのを維持し続けようと思ったら、そのタブーを守り育てないと。

長津 学会があるとネットワークや人の繋がりがあってというのがあり、なんか所属していて安心するというメリットはあります。

安富 そこ、すごい発見だと思うんですけどね。タブーっていうものが、人間関係にとってすごく重要な役割を果たしているっていう発見は、大発見だったと思うんですけど。タブーを踏みにじる人は嫌われる。

7. 「私」を含む研究という方法

長津 安富さんのもう一つの特徴的な方法論として、「問う主体としての私」を含む研究というアプローチを「魂の脱植民地化」という一連の研究で行われています。これは学術的な研究においてはかなり少数派のアプローチだと思うのですが。

安富 これはさっきのタブーの問題ですね。タブーがあるっていうことは、[認識主体に] 認識障害があるっていうことなので。アカデミックな文章は、自分はあたかも認識障害がないかのように振る舞って書くっていう決まりになってますよね。そこでなんで自分には認識障害がないって言えるのかっていうと、それは手法、方法っていうものに依拠し従って研究をしているのであって、そこに私はもういませんっていう前提なんですよ。

長津 そうですね。「良い方法」とは何か、という科学方法論の問題設定も手法、方法に焦点を当てています。

安富 そういう前提で書かれているのがアカデミックな文章っていうものなんですけど、でも、その方法を成り立たせているのがタブーに基づいた部族であるのであれば、それはすごく部族的な方法に過ぎないわけなんですよ。

長津 そこで、認識主体としての〈私〉に焦点を当てる理由は何なのでしょう。

安富 それは結局そうすることがそのタブーに気付くっていうための第1歩だと思うからです。自分を排除した形で議論を進めようとする、その自分にどういうタブーがあるかっていうことは、もう議論に入ってこないんですよ。自分があって初めて、自分の盲点っていうのが問題になり得るのであって。で、そうしたら、盲点を突かれたり、盲点を捨てたり、盲点を乗り越え

ようという行為は、別に危険ではないですよ。自分を改善するっていう、成長させるっていう行為なので。自分自身の成長っていうことと、物事の理解っていうのが、双方発展していくって形でしか認識の成長、発展はないだろうっていう。人間を中心にした考え方をすれば、そうなりますよね。

長津 〈私〉に注目して科学のバイアスを減らす工夫としては、利害相反、例えばこの会社から研究資金をもらってますという場合との類似型として、私の特殊性を捉える見方があります。例えば論文を書くときに、私はマルクス主義者ですとか、そういうのを明示的に書いておけば、全体として科学の客観性が担保されるという、価値観とか私の視点っていうのを、利害相反として捉えるモデルっていうのが一般的なのかなとも思います。

安富 それはもう盲点がないっていう前提じゃないですか。私が問題にしたのは利害ではなくて盲点の方なんで、見えないところなんで。私を消そうとすると、その盲点が盲点のままになってしまうのが問題なんです。ていうか逆なんです。実は盲点を守るために私を消してるんですよ。なんで盲点を守るのか。タブーを踏んだら排除されるから。アカデミックな自分の所属している部族のタブーを守るためには自分を消すしかないんですよ。そしたらそのタブーとか気にしないで、盲点とか気にしないで、方法と手法に従っていくらでも論文が書ける。「それが正しいか正しくないかって、そんなこと私に聞かないでよ」っていう。ニヒリスティックなスタンスなんですよ。だから学者に、物理学者もそうなんですけど、「正しいか正しくないか」って言うのと、「私はこうやってこうやったらこうなりましたって話をしてるので、この結論が正しいか正しくないのか知りませんよ」ってみんな言うんです。

長津 科学哲学でも近年「科学における価値」というテーマがまた盛り上がっているんですけど、まあ「価値と事実」っていう風に、峻別することも乱暴な単純化だとは思いますが、やっぱり科学者は抵抗しますよね、価値が大

事だという主張には。

安富 価値っていうのを盲点とか、タブーだっていう風に思っていないからです。だから価値に誘導されると思ってる。価値から自由になれば盲点が消えると思ってる。いや、関係ない。盲点の話してんですよ。盲点はある。自分の中にあるので、自由になれないです、絶対に。盲点から自由なふりしかできない。

長津 5で議論した「共同体と秩序」という話と、今の暗黙のタブーを共有する科学者の共同体という論点が重複しているように感じるのですが。

安富 まさにそう思いますね。それぞれの部族ごとの科学者、学者、部族のそれぞれのタブーがあって、そのタブーを内面化すると博士号が出る仕組みになっていて、そのタブーに触れると、部族から放逐される。それに適応して生きていくためには自分を消して、手法と方法に従って客観的に作動してる自動機械ですっていうふりをしないといけなくなる。恐ろしいことに、あらゆる分野がそれでできてます。

長津 さっきの秩序が人間の感覚とか、本来的な身体性から湧き上がってくるという話と同じように捉えると、そういう〈私〉を排除した仕組みで知識を社会的に組織していった時に良い知識が生み出せるのかという疑問が生じると思います。

安富 できるわけない。それが、マイケル・ポラニーの Tacit knowing に関する議論²²⁾に私が重要性を見出す理由ですね。Tacit な人間の身体のプロセスがなかったら知識っていうのはそもそも存在しないじゃない。さっきの私の秩序論っていうのはマイケル・ポランニーから来っていて、彼も秩序に関して

22) Michael Polanyi (1966), *The Tacit Dimension*, Garden City, N.Y: Doubleday. (2nd edition in 1983, Gloucester, Mass: Peter Smith.)

はほぼ同じ議論をしています。「人間に秩序を生み出したり維持したりする力があるから、知識がありますよね。で人間を排除したら知識が消えてなくなりますよね。」っていうのが彼の知識論ですね。で、「人間を消して知識だけを独立させようとする」と、暴力を生み出します、破壊を生み出します」っていうのが、マイケル・ポラニーの知識論の中心だと思いますけど。残念ながらそういう知識論はメインストリームじゃないんですよね。客観化しうる、人間から離れて自立化しうるものだけが知識であるっていうのがアカデミズムを支えている。身体が持つ情報とか、つまり現象学的なレベルに降ったような認知のレベルの情報とかが取り出せないようになってるのが、タブーの効果ですね。それで「個人が」システムにふさわしいような形で知識とか認知ってのを形成するようになってるんですね。そこから離脱する方法は、身体性に立ち返ることなんだと思います。

長津 社会構築主義には、あまり身体性に依拠できないような、すべてを相対化するような契機も含まれるように感じます。

安富 ヴィトゲンシュタイン的な観点に立てば、神秘主義に立ち戻るんだと思うんですけど。大切なものは、神秘としてしか捉えられないわけで。自分の身体の作動とかいうのは、もう完全に神秘ですね。その神秘的なものに乗るしかない。できることは、その神秘的なものの作動を破壊するものとか、抑制するものを取り除くってことでしかない。哲学っていうのは、そういうものを取り除く手伝いをするのだっていうのは、ヴィトゲンシュタインの哲学観だと思うんですけど。そういう観点に立ち返った時に最後に残るのはやっぱり身体でしかないと思うんです。

長津 身体はあるんですけど。僕もどっちかっていうと、自分を信じるとかいうのが苦手ではあります。

安富 自分を信じるっていうのは、タブーごと信じちゃうんですね。盲点ごと信じてるんですよ、そうすると果てしない暴力を生み出すんですね。だから自己懷疑が大事なのは、自分の中のタブーと向き合うっていうことなんですよ。でもそれは自分を否定することではないんですよ。自分の中のタブーと戦うってことなんです。

8. 将来世代のためにできること

安富 もうちょっと言えば、盲点とかタブーがどこから来るかという、子供時代に受けた虐待から来るというのが私の考えです。私たちの脳というのは、特に3歳ぐらいまでに受けた虐待からは決して自由になれないんですね。そのプロセスで適応しながら「脳が」形成されるので。でもそれ「虐待による盲点」がなんなのかっていうことを認識することはできるわけですね。だから完全にタブーから自由な精神に至ることは不可能なんですけど、その後ずっといろんな暴力を受けて、博士課程まで行く間にもうボロボロになって、それをできるだけ巻き戻していくっていうことはできるわけです。できるだけみずみずしい、生まれた時の自分の認識に立ち返りたいっていう。不可能なんですけどね。

長津 今要約された来歴は、博士号まで行く人の大多数にはとても共感できる話だと思いますが、アカデミアの外でもそれは基本的に変わらないということでしょうか。

安富 もっときついですよ。余裕がないもん。反省する余裕なんかないですよ、市井の人には。めちゃくちゃ忙しいですからね。私はそれが国民国家っていうものが人間に強いてることだと思うんですよ。つまり自分自身と向き合うのは時間かかるし、エネルギー食うし、大変なことなんで。で、それをされるとシステムにとっては不都合なんですよ。タブーに従って動いて

くれないわけだ。だから国民国家というシステムは、激しい労働と激しい消費っていうのに人を誘導していくんです。激しく労働しては消費していれば棺桶に行くまで何も考えないでつき進めるわけ。これが経済発展というものを生み出して、それがさらなる刺激の拡大ってことを作り続けられるならば、国民国家というシステム—私は国民国家の経済を資本主義って呼んでるんだと思うので資本主義システムって言うのも同じことなんですが—にとってはとても都合がいいんですよ。

長津 近年エコロジカルな経済学やサステナビリティ科学において脱成長の議論が盛り上がりを見せています。日本人でも斎藤幸平氏が人気です。具体的にはどういう政策を考えておられるのでしょうか。UBI (universal basic income) や労働時間短縮、行動経済学によるエコ行動への誘導 (green nudges) 等が提唱されていますが。

安富 それに対して、私の回答は子供を守るなんですよ。子供の魂を守る。さっき言ったみたいに、子供時代に傷つけられた傷って回復不能なんですよ。だから私はどんなに巻き戻しても、多分そんなに巻き戻れないんですよ。だから子供たちに対して加えられる暴力をもし0にできるんだったら、その人たちは私たちとは全然違う、もっと盲点の少ない人になりうるわけですね。で、そういう人たちが成長しながら知識とか技術とかを身につけていったならば、なんとかしてくれるんじゃないか。

長津 子供の教育とか子育てとか、その辺から変えていくしかないよ。

安富 子供に加えられる最大の暴力が学校教育なんですよ。それから貧困なんですよ。それから差別なんです。こういうものと戦わないといけないんです、私たちは。子供たちを差別とか貧困とか虐待から守っていくっていうことに政治とかの全力を上げるならば、タブーの少ない人間をたくさん作り出

せる。なぜ北欧が20世紀の初めには貧乏国だったのに、世界で1番豊かな国々になってるのかっていう問題の鍵は、私はそこだと思いますね。やっぱり子供に加えられる暴力を減らそうとしてきた地域だから、成功してるんじゃないかと。それはなぜかって言うと、人間を労働力として使う時代は、もう20世紀に急速に終わっていったんですよ。人間は創造性っていう形で使わないといけなくなっていった時代。これは20世紀を貫く大きなトレンドだったと思うんですけど、その背景にはコンピューターの導入があるわけです。だから人間を機械の導入によって単純な筋肉の発揮っていうところから開放して、次にコンピューターによって単純な知的作業っていうものから解放して行って、残っているのは、創造性っていうところが問われてる訳ですけど、それを守ろうとした国は成功してるんじゃないかって。逆にその人間の持っている、人間が受けてきた、子供時代とかに受けた暴力性っていうのが、様々な破壊的な活動、政策に発揮されてるんだと思うんです。

長津 子供を守るという提案は、性善説と性悪説というような二元論的な枠組みから出てきている訳では無いと理解していますが。

安富 だから、そうしたらうまくいくとは私は思ってないです。そうする以外ないよねっていう立場です。それが私たちのできる最大限ですよっていう。なぜなら人間の身体を超える計算能力を持ったシステムは作れないんだし、人間の創造性を守る以外に経済発展とか社会とかを回していく方法はもうないわけですよ。他は全部自動化できるわけですから。そしたら人間の創造性、あるいは秩序形成能力っていうところを最大限にする以外にもう残ってる場所、資源がないんですよ。それなのに子供に対しては学校教育を通して念入りに暴力を加えている。現段階ものすごいコストをかけて暴力を加えてるわけですから。だからそのお金で子供たちを守ってやれば、寝るところがあって、誰にも殴られなくて、食べるものがあってっていう条件をまず満たして、それから知りたいことがあったらそれを大人が手伝っ

て、知りたいことがなかったら、まあいいや、寝てろやつって、それでいいと思うんですけど、おそらくそうやって守るっていう風に金を使えば、フィンランドなんか一気に追い越せるんじゃないかと思うんですけど。

長津 大学に関してはどうでしょう。私自身学生に何を伝えたらいいのかよくわからないというのが実情です。

安富 大学というシステムは基本的にはもう終わってるんだと思うんですよ、だいぶ前に。それは別に大学だけでなく、教育というシステムが終わってて。そうじゃなくて、社会とか政治の目的を、私たちの子供たちを守ることに全力をあげるっていう風に、政治の目標を変えないといけないと思うんですよ。そのためには何をしたらいいのかっていうふうに、問いを立て直さないといけないと思ってるんですけど。そうやって子供たちを守る以外に私たちが手をつけられる資源がないっていうのが私の考えです。性善説かどうか知りませんが、それしかない。少なくとも私たちは地球を破壊してきたので、私たちみたいじゃない人間になってもらうしかない。それで地球を減ぼすんだったら、まあ、そりゃしょうがないわ。

9. 馬と子供と田舎で暮らす

長津 ご自身の研究について「社会生態学」という呼び方をされています。

安富 つまり人間のハラスメントっていう問題ですよ。23) つまり人間のコ

23) 二者のコミュニケーションは基盤に乗らないと成立せず、それには双方に一定の努力が必要である。相手を善意で解釈したり、相手の土俵に合わせたりする努力である。互いの努力の結果、相互に学習過程が開かれている状態（創発的コミュニケーション）が実現すれば望ましいが、相手が努力をしてくることを悪用し、さらには操作しようとする場合がある。安富氏はそれを「ハラスメント」と呼んでいる。『複雑さを生きる』（2006）第2章 - 二など。

コミュニケーションを操作して人間を支配するっていうメソッド。それが全社会に埋め込まれてるっていうことに最大の問題を見出していて。けれどもその解決方法というのをやっぱり考えないといけないわけで、それで私が出会ったのが馬と暮らすってことなんですよね。馬のような大きな、けれども攻撃性があまりない動物と一緒に暮らすことで、自分自身の中の暴力性とかと向き合いながら身体を立て直していくことができるんじゃないかと。もちろん全人類が馬と暮らしたら地球が破綻するのであれなんですけど。でも私はとりあえずそれをやってみようということで、田舎に行って馬と暮らすってことをやっていて、今大分に引っ越してきて、馬2頭飼って暮らしてるんですけど。それは、これがどういう変化を私にもたらすかっていう実験というか。だからね、今月いっぱい早期退職しようと思ってるんですよ。²⁴⁾で、インターネットで食ってくかって思っているんですけど。今1歳児と2歳児の子供がいるので、彼らと暮らすということを通じて果たして彼らを私が守れるのか、そして守ることに全力をあげると私はどうなるのかっていうのをやってる感じですね。

長津 馬ということに関連して、other-than-human, more-than-human という視点はサステナビリティ科学、環境人文学でも最近盛んに論じられています。

安富 なぜなのかっていうと、最初はセラピーとかすごい大事じゃないかと思ってたんですよ。でもセラピストって、普通の人より5倍ぐらい自殺するんですよ。カウンセラーってめちゃくちゃやばいんです。それはまあ、そうですね。1日中訳の分かんない話人から聞いたら気が狂うんで。なのでカウンセラーのカウンセリングとかすごい大事らしいんですけど、そのカウンセラーのカウンセリングしてるカウンセラーとかやばいじゃね。みたいな、メタメタな方に行くわけです。やっぱ精神科医とかすごい自殺率高い

24) インタビューは2023年12月26日に行われた。その後、予定通り2023年12月で東京大学東洋文化研究所教授を退職された。

らしいんですよね。そもそも医者が短命ですよね。だから人間に持ち込んじゃダメだなと。人間を癒そうと思ったら、人間じゃないやつに頼るしかなかろうと。その1つが馬なんですけど、なんでかって言うと、個体識別あんまりしないんですよ。人格っていう発想しないものなんで。だから、誰でも乗せてくれるわけなんですけど。犬とか猫だったら、人間をすごい個体識別するから限られてるじゃないですか、セラピーが。馬は誰でもやってくれる。嫌なことされたら反応するし、嬉しいことしてくれたら喜ぶっていう、すごいダイレクトな反応をする生き物なんですよ。かつ草食動物で、牙とか角とかな。歯も噛めるけど、こんだけしか噛めないっていう。そういう動物と触れることで暴力性を癒せるってのは、割と広く知られてることなので。なぜか馬が好きだ。でも、例えば私が馬に乗ったりするようになって、絵を描くようになって、音楽とかやるようになって、それから自分の性自認に気づいて、っていう変化が起きてるんですね。²⁵⁾で起点はどこだったのかと思ったら、やっぱり馬と触れたっていうのはすごい大きかったんで。少なくとも私自身に関しては大きな変化だ。こういう暮らしで、またいつも馬がいるっていう暮らしをしたらどうなるかっていうことをやってるんですけど、でも、これはやっぱり人によって色々だと思うんですけど。ただフィンランドなんかだったら、全員やってもセーフですね。オッケーだと思うんですよね、森の中にみんな住んで。なんかそっちの方に回帰していった方が「いいのではないかと思います」。実は私今住んでるところ大分の山奥なんですけど、ネットがね、4ギガとか5ギガとか出るんですよ。日本最高速でマックス10ギガっての出てたことあって。自治体の政策で、全てのケーブルテレビをインターネットの光ケーブルにしちゃったんですよ。2年前。それまではみんなピーガーって言ったやつでやってた。そこから突然、世界最高速になったんですけど。馬とかと暮らせるこの農場空間で、何

25) 2013年から女物を着るようになり、2014年からは完全に女性の装いで暮らしている。「男性のフリ」をやめた経緯については安富歩『ありのままの私』（ぴあ株式会社、2015年）に詳しい。

ギガっていう通信が可能なんですよ、今は。だから、こうやってインターネットがちゃんと使える田舎ってというのは、今後いろんな形で拡大していくだろうなと思って。そういうライフスタイルを、大学を退官しても維持できますよってことを証明するっていうのが、今のところ1つの研究テーマです。私塾を開いたりして在野で活動している知識人が結構いるから、できるだろうなと思ってんですけど。そうやって、サステナブルな暮らしを作って、馬とか子供と暮らしたらどうなるかっていうことを実験してますね、今。

長津 僕も最近は科学的なサステナビリティ科学の方法論とかよりもそちらの方に興味、希望を見出しています。

安富 だから、小さくても実践をして自分自身の周りに新しい秩序を作り出すっていうのがやっぱり1番革命的な行動じゃないかと思ってます。

長津 経済学者は政策としての scalability がないとか言いそうですが。

安富 私はよく言ってるんですけど、ポジティブ・フィードバックっていう概念。何か大きな方向に転がり出したら、周りの人もそうなるんですよ。そういう影響がパタパタパタって起きてったら、あっという間に量なんていうことは、多分1人から始めても5人になって25人になって125人になってっていう、増えていくと、10回か20回行ったら、ものすごい数になるんですよ。

長津 経済学者が scalability と言う場合、social planner が政策として実施することを念頭に置いてるんだと思う。

安富 そんなことやなくていいよ。誰もが馬を買ったら破綻するので。方向性の問題ですよ。そういうシステムの、たくさん働いてたくさん消費して

棺桶までダッシュみたいな生き方から離れるっていう、それでも生きていけるよっていうことを示す人が増えてきたら、多分人口の何パーセントか、あつという間にそういうふうにしフトすると思うんですけど。人口何パーセントとかそういう風に動いた時には、もう社会のあり方が変わってると思うんで。革命理論、毛沢東革命理論とか、ガンディの非暴力的闘争にしても、例えば私から始める、それが広がるっていう考え方です。それが広がり出したら、本当に物事が広がる時というのは必ず幾何級数的に広がっていくので、あるいは幾何級数の幾何級数みたいな速度で広がるんで、動きが出れば一気に変わるわけですね、システムは。システムを固定させて操作してというのでは、一気に絶対変化しないんで。

10. これからの研究者へのアドバイス

長津 最後に経済学の哲学を研究している若い研究者へのアドバイスをお願いします。

安富 そもそも、まず大学っていうシステムがここ数十年でやっぱりものすごく劣化してて、その中にしがみついて生きていけるっていうのは、めちゃくちゃ大変になってますよね。だから、もうそこはコストパフォーマンス悪いだろうと思うので。大体大学に就職したら、忙しくて研究できないっていうのが世界的トレンドですよ。研究に没頭できる環境って、実は大学にはあんまりなくなってる。それに対して、大学の外で、短時間で稼いで生きるっていうことは、昔に比べてはるかに容易になってますよね。例えば田舎に住んで、生活費あんまりかかんないけど、インターネットで1日3時間ぐらい仕事して、あと研究できるっていう体制を作ることは、そんな不可能じゃないですよ。例えば土地を持ってる人なんか、いつでも、明日でもできますよね。そういう風にして、インターネット上でいろんな形で人と繋がりながら、そこに知的空間を作っていくっていう方向性は、20世紀には夢物語

でしたけども、現実化しつつあると思うんです。そのイノベーターになるっていう道の方が、多分コストパフォーマンスは高いだろうと私は思ってます、今若ければ。別に大学に行ってアカデミックなルートを目指してもいいんだけど、そこはベストではもうないかも。スピノザみたいに生きる道は、スピノザはえらい目にあったけど、スピノザが21世紀に生きてたら結構余裕だったと思う。

長津 もっと生産的だったかもしれませんね。研究方法についてお話を伺ってきましたが、研究対象についてはどうお考えでしょう。何を研究すべきでしょうか？

安富 自分を対象にするってことですよね。結局、何のために勉強するのかっていうと、知りたいんですよね。それで知りたいって時に、誰かが研究してくれてたら助かるんですよ。「それか」って言って勉強すればそれで終わなんです。それで先に行けるんですよ。でも研究者になろうと思うと、「あ、これ研究されてる」ってなるんです。ただ、私自身が感じたことですけど、自分っていうものを問い抜いた場合にね、「自分はいかに愚かで馬鹿でどうしようもない人間で、こんなとんでもないやつになんでなったんだ」っていう風に問いを立てると、人々の研究ってすごい助かるんですよ。「なるほど、こういう研究があって、だから私はこうなのか。こういうことだから私はこうなんだ」みたいにやっていくと別に人が研究してるから困るとかはないんです。その中で、自分の生き方とか自分の思想を発展させていくっていうことが目標なんで。最終的に目標は何なんですかと言ったら、やっぱり立派な人になるってことだと思うんですよ。立派な人になって、自分の生活と自分を豊かにして、自分の身の回りに秩序を作り出して行くっていうことを目標にするんだったら、誰かが研究しているからって絶望する必要は全くないです。というか結局ないと困りますよ、ほんとに。まずやっぱり、それぞれの人に、私にも、父もそうだけど、第2次世界大戦の日本の敗戦っていう

のがやっぱり刻み込まれてるんですよ、人格の中に。なので、20世紀の日本の歴史を勉強したことはすごい助けになったわけで、自分自身の困難に立ち向かう上で。あるいは現代日本社会の様々な問題が私に直接影響を与えている訳で、そういう様々な問題を、例えば水俣病がなんであんなめっちゃくちゃなことをされてるのかとか知るといことが、自分自身を知る上ですごい大事で。そうやって自分を出発点にして、そこから知識を広げていく。何のためにと言えば、生きるために知識がいりますよ。そういう観点で勉強していけば、他人の研究を恐れる必要はなくなるっていう。古代ギリシャの哲学者は、「よく生きる」ために考え抜きましたが、そこに還る、ということかもしれません。

長津 本日は長い間ありがとうございました。

安富歩氏 主要著作

- 安富歩（1997）『「満洲国」の金融』創文社。
- （2000）『貨幣の複雑性：生成と崩壊の理論』創文社。
- （2006）『複雑さを生きる：やわらかな制御』岩波書店。
- （2008）『生きるための経済学：〈選択の自由〉からの脱却』NHK出版。
- （2010）『経済学の船出：創発の海へ』NTT出版。
- （2011）『生きる技法』青灯社。
- （2012a）『原発危機と「東大話法」：傍観者の論理・欺瞞の言語』明石書店。
- （2012b）『生きるための論語』筑摩新書。
- （2013）『合理的な神秘主義：生きるための思想史』青灯社。
- （2014）『ドロッカーと論語』東洋経済新報社。
- （2015）『満洲暴走 隠された構造：大豆・満鉄・総力戦』角川新書。
- （2016）『マイケル・ジャクソンの思想』アルテスパブリッシング。（新版、2021年）
- （2017）『Tao 老子の教え：あるがままに生きる』デイスカヴァー・トゥエンティワン。
- 安富歩編訳（2012）『超訳 論語』デイスカヴァー・トゥエンティワン。
- 安富歩・本條晴一郎（2007）『ハラスメントは連鎖する：「しつけ」「教育」という呪縛』光文社。
- 安富歩・深尾葉子編（2009）『「満洲」の成立：森林の消尽と近代空間の形成』名古屋大学出版会。
- 安富歩・本田雅人（2011）『今を生きる親鸞』樹心社。